

寄書

スケッチ及スクラップ

遠

一、習畫者のスケッチスクラップは猶、乞丐兒の米袋のごとき乎、他人の眼には雜駁にムサクロシク見ゆらんも而かも我財産と我生命とは一に此中に在り

二、スケッチは大抵は梗概を速寫せる畫稿なりサレド時々一物(又は其一部分)を極めて精確に描寫し置く要あり、粗密相待ちて始めて修養に資すべし

三、樹木の嫩葉を描くに印度藍に配するに陽部にガンボツヂ。陰部にクローム、エルローを用ひき昨日曜寫生に鎮守の森の雜木の中に一樹陽部のクローム、エルロー色の強きが交りて爲に單調平板を破り生き／＼した景物を作り居れるを見て今まで自己流の型を立て置けるを悔ひき自然の師は不言の中に我々を導くなり

四、大下先生の點景人物は女子は凡六頭高半。男子は凡七、〇一七、五頭高なり用意の周到なるを見るべし某先生のは七、五一八、五頭高あり日本人の體格として高きに過ぐ某雜誌某氏作の假寐の婦人は

其右手を曲げて頰杖つきたる様なるが試に其手を測るに直立して指頭地を摩すべき比尺なりコハ手長猿をモデルに用ひての作畫なるべし

五、一年中僅に三ヶ月を除けば其他は雪を見得る我が地方にては雪色の研究には天與の幸福を享け居れり雪色白からず千變萬化。トテモ十四色入の繪具箱では物足らぬなり予等は越後人の天職として藝用雪色美研究を勉めんかな

六、或る一の美しき色を作らんとするに所持の繪具箱中のドノ彩料を用ひても面白からずして苦悶することあり試に其色は其儘にし放つておき周圍の色を塗り直はす時は調和の上よりして目的の色に似寄りて見ゆる様になることあり其物の色を研究するは大に可、而同時に相隣接する色をも併せて研究すべきものにや

七、わが友口を揃へて曰ふ「コノ年になつて畫でもあるまい」と予が年四十年後尙二十年の學習期間あり友又曰ふ「兎角時間が無い」と予が執務は一日十四時平均なり六時の睡眠三時間の讀書及一時間の

習畫の餘地あり友等のいふ所は時と年とに非らずして志の有無に關することなり

八、奇想天來は不折氏なり筆跡奔放に過ぎずや紙背に覺猷僧正の姿朦朧として現はる。三宅克巳氏は型を極め過ぎすや和山外面氏渡邊審也氏西野猶久馬氏ナドモ……其作一枚を觀れば惚れ／＼する様なるも數重ね度重ぬるに隨て其單調に飽くなり。丸山晚霞先生の畫ドシ／＼出るは有り難し取材面白く筆力の雄渾豪爽能く我萎靡せる氣力を奮起せしむ但何處となく理財に疎き性格が見ゆるなり實際は如何にや。眞野默念先生の畫を觀ると自らノ、ンキとなり。汀鶯先生の畫に對しては自ら謹嚴の心持ちとなる。

九、春鳥會幹部には常に平和の氣満つと思ほし而るに「忍ぶ戀地」や「怖しきもの」ナド云ふ嶮呑な合作はドウして出來たか外部の者には分ならず

十、大下先生のスケッチ物も稀には新聞雜誌に載せて頂きたい者なり月一回のみづゑ其他の雜誌の一二のみにてはヨリ多く見たき心山々なるも無理ならず但先生の

御作中の飛鳥は常に姿勢単一に見ゆまは
マダ素人眼の届かぬ故に口同し幹部にて
も他先生の飛鳥には變化あり

此頃のお小言

近藤 靜遊

店にばかり居すと折々運動のため散策に出
よと勧められても、田舎は同じような處ば
かり故出ても飽きがきて直に歸る、亦出る
戻る、格別保養にもならぬのである、
或日不斗水彩畫の葉を購讀して早速入用の
道具を買求め、試に寫生に出たが素より經
験がない故描けそうな筈はなけれど、面白
いので其後度々行くと同じ處も景色は刻々
變化する事に氣がつき外出は益々愉快にな
つて、胃病や惱病は跡方もなく全快した、
外へばかり出ずと内にも居て貰はれば店が
差聞へるとは、此頃のお叱言である。

僕の水彩畫の器具

S I 生

大家の肉筆の水彩畫は見た事はなし、ワッ
トマン一枚得られない田舎に居る僕には水
彩畫の器具を一々買ふ事が出来ない、繪の
具、筆、鉛筆等の外は悉く自分で製らへた

のばかりを用ひて居る、けれども葉書大や
十六切位の一寸したスケッチは充分に間に
合ふ、畫架や三脚床几や、欲するが儘に得
られる都の坊ちやま達には珍らしいだらう
と思うから參考の爲に御目に否御耳に入れ
ませうか、先づ僕の畫架は長さ四尺、直經
六七分位の竹三本の上部を針金で開閉の出
來る様にくくり、二本へは畫板を載せる爲
に四つか五つの穴を双方へあけて、竹製の
釘の様な畫板止めをさし、欲する處に従つ
て畫板を四段か五段か上下の出來る様にし
た、携帶には少々不便であるが製法の簡單
なのを主としたからである、三脚床几は木
ならばよいが成べく手製で製法の容易なの
と思つたから、みづゑ第九號に出て居た靜
遠君の示されたのを竹でやつた、長さ二尺
の竹三本を釘で止め猶、念の爲、紐でく
つた、上は白布で張つた、但し之れ丈は女
の手を借りた、畫板は柵にしてあつた不用
の奴を削つて横へ棧迄も打ち付けた、大き
さは一尺に一尺三寸、鉋が悪いので見た處
はいかにも立派でないが、それでも畫用紙
の四ツ切位の水貼りが出来る、見取定規は

菓子箱の切れを仕事に來て居た大工に削つ
て貰つて製らへた、筆洗は直徑一寸六分、
深さ一寸八分の竹の筒で皮の方を削つて繪
の具箱に取付けられる様な柄を製へ、木兎
てみがいた、此れには一寸苦心して半日も
かゝつた、水筒は一合餘り入る硝子瓶で間
に合はせ、海綿は暴風雨の際濱へ波の爲め
に打ち上げられたのを拾つて置いたのが、
浪にもまれて柔かく氣麗なので此れを使ふ
事にした、畫囊はないから風呂敷包にして
行く、畫架と三脚とは一處にくりつて、然
し追て畫囊も製へるつもり、器具は實に不
完全だが其れでも大方は自分で製らへた
ものだから嬉しい、之れを持って青葉の蔭
へ畫架を据え、そよ吹く涼しい風に吹かれ
て筆を走らせて居ると梢に鳴いて居る蟬の
聲迄が何時もの暑くろしい眠い調子とは違
つて勇ましい愉快な涼しい様な氣持がす
る。

會員徽章は出來たら知らせますから御催促
御無用に願ひます